

【実践報告】

学生の継続的な国際交流の意義を考える

忠北大学医学部との取り組みから

今福 輪太郎¹⁾²⁾, 千田 隆夫³⁾

¹⁾ 岐阜大学医学教育開発研究センター

²⁾ 岐阜大学教育推進・学生支援機構

³⁾ 岐阜大学医学部

要旨

韓国の忠北大学医学部と岐阜大学医学部は、2009年に部局間協定を締結して以来、毎年、5日間前後の交流プログラムを企画し、双方の教員と学生の派遣および受入れを行なってきた。2018年に忠北大学のある韓国清州市で開催された第11回の学生交流プログラムには、本学の医学科学生計11名が参加している。毎年、医療に関する見聞を広げるための病院見学や文化理解を促す史跡観光や博物館ツアー、英語コミュニケーション能力の向上を目指した英語シンポジウムなどが企画され、有意義な学習機会となっている。また、本プログラムは、双方の学生が企画・準備段階から主体的に関わることも特徴的である。本稿では、継続的に実施している本プログラムの概要を報告するとともに、その教育的意義について考察する。

キーワード：国際交流，異文化対応能力，受容態度，英語コミュニケーション

1. はじめに

2018年で訪日外国人数は3000万人を突破し、在留外国人数は263万人（総人口の2%以上）になるといわれている（日本政府観光局，2018；法務省，2018）。日本社会において、外国人とコミュニケーションをとる機会は増えており、大学教育の早期から学生の異文化対応能力（Intercultural Competence）を促す学習機会を提供することは重要である。Deardorff（2006）は、異文化対応能力を下記のように分類している。

知識：文化的な自己の気づき（cultural self-awareness）、文化特有の知識（cultural specific knowledge）、社会言語的な知識（socio-linguistic awareness）

技能：観察，リスニング，解釈，評価，分析，関連づけ

態度：全ての文化に対する敬意，先入観のないオープンな心，好奇心，冒険心，曖昧さに対する寛容性，公平性

つまり，異文化対応能力に関わる言語技能だけでなく知識・態度の涵養を目的とした総合的なプログラムの構築を意識しなければならない。

岐阜大学医学部では，6年次に海外の医療教育機関での臨床実習に参加する学生が毎年10～15名おり，5年次には海外臨床実習の準備教育として医療英語ワークショップ（課外実習）を開講している（今福ら，2017）。このワークショップの目的は，講義やロールプレイを通して，英語による病歴聴取や身体診察，症例報告が実践できることにある。しかしながら，現状として，初年次から段階的に「文化」や異文化間コミュニケーションを学ぶ機会は提供できていない。

海外では，リヨン大学（フランス），オタワ大学（カナダ），上海交通大学（中国）の医学部が「医学と人文科学」をテーマに，医学，文化，歴史，芸術，哲学などをお互いから学ぶサマースクールプログラムを開発している。歴史としては浅く，2018年に第2回サマースクールがリヨンで開催された（Chour, 2018）。一方で，本学医学部は2009年に忠北大学（韓国）医学部と部局間協定を締結して以来，2018年までに計11回交流プログラムを実施してきた（奇数回は忠北大学，偶数回は岐阜大学で開催）。本プログラムでは，交流を通じて英語や文化・歴史，医療について学ぶ工夫がなされている。本稿では，この忠北大学との継続的な国際交流プログラムの実践内容を報告するとともに，本プログラムの国際教育の学習機会として発展可能性について考察したい。

2. 忠北大学との継続的な国際交流

2009年に当時岐阜大学医学部の教授であった清水克時名誉教授と忠北大学医学部の Kim Young Min 教授の縁で始まった本プログラムは，2018年までの総交流人数は約280名にのぼる。5日間の滞在中に，病院見学や英語シンポジウム，博物館や景勝地の訪問，市街地の散策などがプログラムに組み込まれるが，こうした企画は，約3か月前から両校の学生が主体となってメール等で連絡を取り合いながら準備を行なう。また，現地学生との親睦を深め，異文化コミュニケーションや社会的スキルを磨く時間を多く持つために，学生はホームステイや大学内にある学生寮に泊まることになっている。2017年の岐阜大学開催と2018年の忠北大学開催の交流プログラムの概要を下記に紹介する。

第10回忠北－岐阜大学交流プログラム（2017年）

2017年は，忠北大学医学部・看護学部の学生12名と引率教員2名の計14名が岐阜大学を訪問した。岐阜大学の医学科・看護学科の学生は5日間の日程で約20名が参加している。

第10回交流プログラムの詳細は表1・図1に示す。本プログラムでは、10周年記念式典が執り行われ、プログラム創設者であるKim教授の挨拶と清水名誉教授から「10周年までの歩みとその意義」についての記念講演が行われた¹⁾。また、日本の技術や文化に触れるトヨタ産業技術記念館の見学や犬山城の散策に加えて、大衆文化、食文化、医療、学生生活のテーマを英語で発表する「英語シンポジウム」が開催された。各発表後には、東洋医学や伝統行事、美容、アニメに関する質疑応答が活発になされ、両国の文化の類似点や相違点を明らかにすることができた。岐阜市民病院では、手術室や屋上ヘリポート、病棟施設などを見学する機会があり、忠北大で病棟実習に出ている高学年の学生からは活発な質問がなされた。さらに、Welcome Partyや鵜飼いには多くの教員の参加もあり、学生だけでなく教員間の交流も深められた。

1日目		3日目	
1:00pm	中部国際空港（名古屋）到着	8:40am	医学部記念会館前 集合
3:30pm	岐阜大学医学部 到着	9:45am	犬山城
4:00pm	開会式	12:00nn	昼食
6:00pm	Welcome Party	4:00pm	バーベキュー（各務原）
8:30pm	ホームステイ先へ	7:00pm	ショッピング
2日目		4日目	
8:20am	岐阜大学バス停 集合	8:30am	岐阜大学バス停 集合
9:00	岐阜市民病院 見学	9:30am	トヨタ産業技術記念館（名古屋）
12:00am	昼食	11:30am	昼食
2:00pm	アイスブレイク	1:30pm	英語シンポジウム
4:00pm	国際交流10周年記念式典	4:00pm	閉会式（箏曲部による演奏）
5:30pm	長良川鵜飼い観覧	6:00pm	Farewell Party
8:50pm	ホームステイ先へ		
		5日目	
		9:00am	見送り（名鉄岐阜駅）
		10:30am	中部国際空港着

表1：第10回岐阜－忠北大学交流プログラム（2017年度）



オリエンテーション



集合写真（10周年記念式典）



鵜飼い観覧

図1：第10回交流プログラムの様子

第 11 回忠北-岐阜大学交流プログラム (2018 年)

2018 年は、岐阜大学医学部医学科の学生 11 名と引率教員 1 名の計 12 名が、韓国忠清北道清州市にある忠北大学を訪問した。忠北大学側は、医学科と看護学科学生計 20 名と忠北大学医学部長、副学部長、リハビリテーション医学教授、整形外科教授が参加した。第 11 回交流プログラムの詳細は表 2・図 2 に示す。

1 日目		4 日目	
3:50pm	韓国仁川空港到着	8:50am	忠北大学医学部棟 集合
7:00pm	忠北大学到着	9:00am	バス移動
7:30pm	Welcome party	10:20am	法住寺 (Beopjusa Temple) 散策
8:50pm	ホームステイ先 (5 名) もしくは学生寮 (6 名) へ移動	1:00pm	昼食
2 日目		2:00pm	忠北大学 学生街 散策
8:50am	忠北大学医学部棟 集合	4:00pm	ミニコンサート: 忠北大学学生による音楽 (バンド) コンサート
9:00	バス移動	5:00pm	Closing Ceremony
10:30am	百済文化団地 (Baekje Cultural Land) 歴史・伝統文化を体験	6:00pm	Farewell Party
12:30-1:30pm	昼食	5 日目	
3:30pm	ショッピングセンター	11:20am	昼食 (韓国伝統料理)
6:30pm	夕食	1:30pm	高速バスで仁川空港へ
7:30pm	Suamgol Painted Village		
3 日目			
9:50am	忠北大学医学部棟 集合		
10:00am	English Symposium		
12:00nn	昼食		
1:30pm	忠北大学校医学部附属病院 見学 総合内科, 呼吸器病棟, 外科, 手術室 (Da Vinci), 救急などを見学		
6:00pm	夕食 (冷麺)		
8:00pm	清州市街地散策 (Sungan road)		

表 2 : 第 11 回 忠北-岐阜大学交流プログラム (2018 年度)



集合写真 (忠北大医学部棟前)



英語シンポジウム



病院見学 (呼吸器病棟)

図 2 : 第 11 回交流プログラムの様子

本プログラムでは、百済最後の都、扶余にある歴史テーマパーク百済文化団地 (BAEKJE Cultural Land) や韓国唯一の木塔で国宝に指定されている法住寺 (Beopjusa Temple)、忠北大学がある清州市の市街地散策など、百済王朝や寺院建築など韓国の歴史・文化を学ぶ機会を得た。また、両校の学生が医療や保健システム、ポップカルチャー、食文化、学生生活について発表する英語シンポジウムでは、英語での発表や議論の仕方を学ぶことができた。特に、緊張しながらも原稿を準備し一生懸命発表する者、流ちょうな英語で発表する者、動画や写真、図を駆使する者など、各々の発表には個性が表れており、楽しく且つ有意義な時間をもてた。忠北大学附属病院での病棟見学では、総合内科や呼吸器科、救急、手術室など様々な施設や設備を見学したり、各診療科の医師から最新の研究や治療に関する話を聞いたり、韓国の医療についても多くの学びを得ることができた。岐阜大学からの参加学生は前年度の岐阜大学で開催した第10回交流プログラムに参加した学生は、忠北大学の学生と韓国で再会する機会となり、親睦がより深められたといえる。

3. 忠北大学との国際交流からの学びと発展可能性

本プログラムは、正規のカリキュラムのような構造化された教育とはいえないが、インフォーマルな交流や活動を通じて、知識、技能、態度を含む異文化対応能力を涵養する機会になっている。具体的には、プログラムの参加を通じて、主体性と当事者意識、英語コミュニケーション能力、異文化理解と受容的な態度、医療システムの理解、学生間の関係・親交の深化が促された可能性がある。下記に、各々について考察する。

第一に、学生の主体性や当事者意識が高められる。プログラムの企画や運営、準備は学生が主体的に取り組み、コーディネーターである教員はそのサポート役として助言を与える役割を担う。特に、開催校側の学生は、訪問学生の宿泊先やスケジュール立案、アクティビティの企画、予算・会計の管理、移動方法の確認等の準備をする必要がある。教職員および学生との綿密な打ち合わせを数か月前より行う必要がある。さらに、準備に関しては、訪問学生との英語でのメールでの打ち合わせもしなければならない。準備段階から主体的に学生が参画することで、当プログラムへの当事者意識が高められる。一つのことを主体的にやり遂げる達成感や成功体験は、その後の学習や医師としての人間形成に少なからず影響を与えるのではないかと考える。同様に、岩本(2010)も成功体験の積み重ねが学習継続上非常に重要であることを指摘している。

第二に、英語コミュニケーション能力の向上が期待できる。両校の学生は、準備の段階からメールでの打ち合わせや英語シンポジウムでの発表と質疑応答、食事や移動中の何気ない会話など、あらゆる場面で英語によるコミュニケーションをとる必要がある。英語使用に対して不安を持つ学生も積極的にコミュニケーションをとれる環境にあるといえる。特に、英語が母語でない者同士のコミュニケーションになるため、双方はわかりやすい英

語を心がけるとともに、発音や文法、語彙、表現など言語的な誤りに対してもお互いが寛容になれる。さらに、日本と韓国は地理的にも近く、文化的にも共通・共有する点が多いため親近感をもつことで英語使用に対する心理的不安は軽減されるだろう。Horwitzら(1986)は、リスニングとスピーキングが外国語学習状況で最も不安が高くなると指摘しているが、本プログラムでは、英語試験のスコアがあまり高くない学生も含めて全ての参加者が積極的にコミュニケーションをとりあっていることが観察されている。

第三に、異文化理解と受容態度が促される。特に、お互いのドラマやアニメ、歌、スポーツなどの大衆文化、勉強や部活、休暇中の過ごし方などの学生生活、将来のキャリア、言語などの話題を通して、韓国文化、日本文化とは何か、そこで暮らしている人々はどのような考え方をもち、どのような経験をしているのかを深く理解することができる。また、それが自文化を見つめなおすきっかけにもなる。Byran(2007)は、異文化に対する態度として「対等な関係において他者と関わる機会を見つけ出し、活かそうとする姿勢」や「自文化や他文化における習慣や風習に関して他者の見解を求める好奇心」などを挙げている。両校の学生は積極的な交流、対話を通して、上記のような文化の受容態度を育んだと考えられる。

第四に、医療に対する理解が深められる。岐阜市民病院での見学では、手術室や屋上ヘリポートなどの施設を見学するだけでなく、市中病院としての役割や専門職間の連携、臨床教育の体制など、また、忠北大での病院見学では、総合内科、救急、呼吸器、リハビリテーション科など各診療科の病棟を見学するとともに、各々の担当医師から専門職としての役割や責任、治療やケアに関わる連携体制、設備等だけでなく最新の臨床研究の知見について話を聞くことができた。Saikiら(2019)は、臨床指導医向けの国際ファカルティデベロップメントの実施で鍵となる要素は、「国際的な文脈における経験」「実際の現場での観察学習」「対話による省察」を挙げている。本プログラムは、観察学習というほどの教育機会ではないが、この病院見学には、国際性や実際の現場に入る活動の要素が含まれており、医療を学ぶ学生にとってはインパクトのあるイベントになったと考えられる。

第五に、先入観のないオープンな心で学生間の関係や親交が深められる。5日間の交流を通じて参加学生は「韓国人」「日本人」というお互いの認識は薄れ、一人の人間として向き合う関係性に発展されたように見える。プログラム参加後も両校の学生達はSNS等を通じてコミュニケーションを図ったり、個人的に岐阜や韓国を訪問したりして継続的に親交を深めている。つまり、学生は日本人として、韓国人としてのアイデンティティを大切にしながらも、対話を通じて東アジア市民(≒世界市民)としての意識が高められたのかもしれない。トムソン木下(2016)は、外国語教育における大きな目標は世界市民を育てることであり、その根底にあるのは「つながる力」であると強調している。

以上から、本交流プログラムは、知識、技能、態度を含む異文化対応能力を育む「国際共修」の場として捉えることができる。国際共修は世界市民(Global Citizen)教育の基盤となり、グローバル人材育成の発展に果たす役割は大きいとされる(末松, 2017)。この交

流プログラムは「隠れたカリキュラム」として、学生の異文化対応能力を涵養する学習機会になる可能性を秘めている。つまり、6年次に海外臨床実習を希望する学生が増えている状況の中、こうした継続的な国際交流プログラムは「異文化対応能力」の基盤を築く貴重な場になると考える。

【注】

1) 「VOICE－岐大医学部から－」(<http://www.med.gifu-u.ac.jp/voice-t/085.html>) で、10周年記念式典について報告されている。

【参考文献】

今福輪太郎・早川佳穂・西城卓也 (2017) 「大学全体で支える国際教育プログラムを目指して：海外臨床実習の準備教育の取り組みから」『岐阜大学教育推進・学生支援機構年報』第3号, 169－177頁。

岩本尚希 (2010) 「外国語学習者の学習継続要因に関する一考察：言語学習ヒストリーから」『桜美林言語教育論叢』第6巻, 29－43頁。

末松和子 (2017) 「「内なる国際化」でグローバル人材を育てる－国際共修を通じたカリキュラムの国際化－」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第3巻, 41－51頁。

トムソン木下千尋 (編) (2016) 『人とつながり、世界とつながる日本語教育』くろしお出版。

日本政府観光局 (2018) 『月別・年別統計データ (訪日外国人・出国日本人)』
https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor_trends/ (令和元年7月1日確認)。

法務省 (2018) 『平成30年6月現在における在留外国人数について (速報値)』
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00076.html (令和元年7月1日確認)。

Bryam, M. (1997). Teaching and assessing intercultural communicative competence. Cleveon: Multilingual Matters.

Chour, A., Syeda, SH., Lim, JW., Bin, BL., Rossignol JG., et al.. (2008). An overview of the medicine and humanities international program, an international educational initiative. Paper presented at Association for Medical Education in Europe (AMEE) conference. Basel, Switzerland.

Deardorff, D.K. (2006). The identification and assessment of intercultural competence as a student outcome of internationalization at institutions of higher education in the United States. *Journal of Studies in International Education*, 10, 241-266.

Horwitz, E., Horwitez, M., & Cope, J. (1986). Foreign language classroom anxiety. *Modern Language Journal*, 70, 125-132.

Saiki, T., Imafuku, R., Pickering, J., Suzuki, Y., & Steinert, Y. (2019). On-site observational learning in faculty development: impact of an international program on clinical teaching in medicine. *Journal of Continuing Education in the Health Professions*, 39(2), 144-151.

【謝辞】

忠北大学－岐阜大学交流プログラムの創設および発展にご尽力いただいた岐阜大学清水克時名誉教授と忠北大学 Kim Yong Min 元教授，また忠北大学のコーディネーターを担当されている Heui Je Bang 教授に感謝の意を表します。